

## 書評

山内俊雄 編集統括, 精神疾患と認知機能研究会 編

## 精神疾患と認知機能

神庭重信

「精神疾患と認知機能」を読みあげるのにおよそ2か月を要した。私はもっぱら情動を研究しており、認知のことは門外漢に近いからである。しかもまとまって本を読む時間が取れないので、他の本と並行して少しずつ読み進みしかなかった。しかし全章を読了した今、精神疾患の認知研究がかくも進歩していることを知り強い感動を禁じ得ないでいる。

認知科学(狭義)は、記憶、言語、思考、方略、遂行、覚醒、注意、知性などの認知要素を主な対象とする。これは言い換えれば、「意識」と「言葉」という、我々の「思索の武器」を対象としているといえようか。もっとも、脳は階層性と局在性を持ち連合して働くものなので、情動や無意識を除外して認知の真の姿に迫ることはできないだろう。たとえば社会的認知はまさに情動と一体となった認知である。知の極みともいえる数学ですら感情をいれなければ成立しないと言ったのは岡 潔である。これはいったいどういうことなのかと思う。また、認知科学が脳を問題とするときには、情報のシステム系としてとらえるためか、神経回路レベルでとどまり、薬物の影響などは別にして、物質を取り扱うことは少ないように思う。いずれは回路機能を担っている物質と認知の关系到まで踏み込んで欲しい。

近年とみに認知科学が盛んになったのは、二種類の測定法の進歩に負うところが大きいと思う。1つは、意識の要素的働きを測定しこれを数値に置き換える、巧妙に工夫された心理テストの開発である。他方は、生理学や画像の技術革新により、脳の活動や構造をかなりの精度をもって測定できるようになったことである。つまり認知科学は、心身並行論を前提として、2

つの測定値間の関係を研究する科学へと姿を変えつつあり、ついには、ベルグソンが不可能と考えた、脳と精神の関数の発見も可能ではないか、という期待すら抱かせるまでに至っている。このことは、IQ に対して WAIS、脳機能に対して脳波計しかなかった時代では全くの夢であった。

ここで忘れてならないことは、心理テストが測定しているものはいったい何かと考えることである。むろん同じことが脳の測定についても言える。言うまでもなく、すべての測定値は“測定時の諸条件”の中で観察されて得られるものだからだ。しかしそれを踏まえても疑問は尽きない。我々の関心事である統合失調症を例に取るならば、作業記憶や遂行機能の障害が近年注目されているものの、それ以前からミリ秒カンドでの知覚処理に異常があることがわかっている。はたして前頭葉の障害を、知覚過程の障害と独立した問題としてよいのだろうか。注意や遂行機能は、幻聴などの異常体験や精神病水準の情動障害に左右されないのだろうか。

とまれ、精神疾患を対象とした認知研究を克明に取り上げた本書は、山内俊雄氏を中心に一級の精神科医により巧みに編集され、多数の気鋭の研究者の手で書かれた実にアカデミックな本である。私のように認知科学の基礎のないものはきつと随所で難儀することであろう。しかし時間をかけてでも、認知科学の基礎から精神疾患の研究にわたる全章を読み通してほしい。きつと精神疾患の見方が変わるはずである。

(九州大学大学院医学研究院精神病態医学分野)

●B5 341 頁 2009 定価 10,500 円(本体 10,000 円+税) 新興医学出版社